

芒・蒲を描く

—身体感覚を研ぎ澄ませ 生き生きとした線を生む—

西井恵美子（和歌山市立松江小学校）



身体を使って伸び上がりながら描く

そして出来上がったものを鑑賞し、いきいきとした線が空間をつくり出すことを知る、視覚的な学びにつなげたい。

題材コンセプト

中国や日本の絵画では、筆による描線の価値は「気韻生動」にあるとされてきた。子どもの描線も生命感あふれるものである。彼らの線描のダイナミズムを身体全体で大きく表現させるために、ここでは身長大の用紙に、伸び上がる身体運動を生かして、芒などの勢いある葉の表現に挑戦させたい。そして芒の穂や蒲の穂を描き足して鑑賞するときに、身体運動の軌跡であった線が、芒や蒲のように「見える」ことに気づく。身体の行為性が重要な前半の活動と、穂を描き加え、鑑賞するなかで視覚性が大きく浮上する後半の活動。この学びの飛躍と対比が本題材のねらいである。

1. 題材について

線は身体性と密接にかかわって生み出される。しかし、普段机上で文字を書いている中では、そのことを実感しにくい。そこで、腕を軸に身体全体を使って生み出すダイナミックな動きを体験し、そこから生まれる線のおもしろさを感じてほしいと考えた。そして、線が複数組み合わせられることで生まれる世界を感じ、味わう鑑賞活動にもつなげていく。

身体全体から生まれるダイナミックな線が表現できるよう、刷毛や書筆を使い、墨の濃淡 2 種類を設定し、個々に好きな方を選択して取り組む。下から上へと身体が伸び上がるイメージを持たせ、草一本に思いをこめて描く活動を計画した。身体と刷毛、筆が連動して生まれる線の愉しさを味わえるだろう。

2. 学習目標

- (1) 線を描くことに関心を持ち、よさやおもしろさを感じる。[関心・態度]
- (2) 刷毛や筆から生まれる線を楽しみながら自分の描きたい線を思い浮かべる。[発想・構想]
- (3) 草や芒、藁を思い浮かべ、腕、身体全体を使って描線する。[創造的技能]
- (4) 身体が生んだ線のおもしろさを鑑賞し、その視覚的世界からイメージを広げる。[鑑賞]

3. 学習の流れ・指導計画

『芒・蒲を描く～からだでかいてみよう～』

(小学校第 2 学年 全 2 時間)

■第一次：身体で描くイメージを持つ。

単に「大きな画面に草の線を描こう」と言ってもそのイメージは浮かびづらい。そこで草がずっと上に伸びる様子を、身体で再現してみるよう投げかける。腕やひじ、足やひざなど、身身体全体を使って、下から上に伸び上がる動きを繰り返して体験し、大きな軌跡をイメージする。そうすることで身体の動きがのびやかな線を生むことを感じさせたい。

■第二次：草の線を描く。

大きな画面に墨の濃淡 2 種類で草の線を描く。墨の濃さと使う筆は個々に選択する。同じ画面

に一人ずつ順に草の線を描いていくことで、画面に対する緊張感も生まれるだろう。そして、最後に芒・蒲の穂を描き加えることで線によって画面の世界が変わることも実感できるだろう。低学年の子どもが、ダイナミックに身体を動かし、草を表す線を描くことができるような指導の工夫や場の設定を考えたい。

■第三次：線や線によって生まれた世界を鑑賞する。

一人ひとりの草の線が集まり、重なりながら生まれる作品の中で、線の太さや向き、線質の違い、かすれや奥行きなどに着目し、気づいたことや感じたことを話し合う。また、好きな線や気に行ったところを自分の言葉で表現することで、表した線から広がる世界を味わうことができるだろう。

4. 指導のポイント・学びのフォーカス

(1) 身体の動きで線を描いて楽しむ造形遊び

子どもたち自身の身長を越えるくらいの高さまで腕を振り上げ、のびやかな線を描く前段階として、水を含ませた刷毛で黒板に線を描く活動を行った。腕やひじ、足やひざなど、身体全体を使って下から上に伸び上がる動きを繰り返し体験した後、実際に刷毛を持って描いてみる。[写真1]次々に表現していくと、みるみるうちに黒板に草の世界が再現できた。[写真2]しかし、黒板に描いた線はすぐに乾燥して消えていく。

写真1



繰り返すうちにさらにダイナミックな動きへ

写真2



描いては消え、消えては描く草の世界

描いては消え、消えては描く造形遊びを繰り返し行うことで、子どもたちは繰り返し線を描きながら、身体の動きのイメージをつかんでいった。

(2) 材料・用具と場の設定

画材は墨、刷毛と書筆を用いる。墨は自然と奥行き感が生まれるよう、濃墨と薄墨の2種類を事前に用意しておいた。画面は1M×2Mくらいの模造紙である。その大画面に向かって、クラス全員の前で一人ひとり前に歩み出て、線を描いていく。友達に見守られ、緊張感が高まる場である。そこで、線の向きや他の線とのバランスなど、線を描く前に見通しを立て、心が定まったところで一気に描き上げる、「気韻生動」である。一斉にそれぞれが遊びながら描く場ではなく、一人ひとりの表現を大切にすることを設定することで、身体感覚や線に対する意識が研



自分の身体を越える描線の軌跡

ぎ澄まされていく。子どもたちは2年生という学年以上の集中力を持って取り組み、生き生きとした線を生み出した。



心と身体を整えて、見守られる緊張感の中で描く

5. 鑑賞と批評

(1) 画面の変化を鑑賞する

草の線を描き終わった後、その画面を鑑賞する。ある子どもが開口一番に「草の世界ができた」と表現した。そして「草の中にいるみたい」「バッタになった気分」などとロク々に言い始める。一本の草の線を描いていたときは、その線だけに意識を注いでいたが、離れて鑑賞すると、その全体像をとらえ始め、鑑賞の能力がいきいきと働き出す。

そこに、芒の穂を描き足す。それまで「草の世界」であったものが「芒の世界」に変わっていくのを感じる。そして、出来上がった芒の世界に入り込んでいく。「さっきのはね、夏だよ。これは秋。」とそれぞれの植物をイメージし、そ



「草を描く」和歌山市立松江小学校2年生 指導：西井恵美子，2011



「芒を描く」和歌山市立松江小学校2年生 指導：西井恵美子，2011

の季節感まで思い浮かべた発言が出た。一つひとつの線が集まり、重なり合い、奥行きを生み出していることをしっかりと感じ取っている。

それは、子どもが鑑賞によって、身体運動で生まれた線を視覚的、絵画的な表現としてとらえている言葉である。

(2) 題材を振り返って

本題材は、身体活動を重視していきいきと線を描く学習と、生み出された線たちが作り出す空間やイメージを視覚的にとらえる鑑賞の学習が自然な流れでつながっている。子どもたちは、描いたものを鑑賞し、さらにその上に表現を重ねて出来上がったものを再度鑑賞することで、生き生きとした線の重なりが空間を生み出すこ

とや、空間のイメージが変化することにも気づいただろう。

もうひとつの作品「蒲を描く」と「蒲のある風景」を見比べてみる。するとそこに、子どもたちの描いた愛着ある一つひとつの線が作り出す蒲の世界が、実際の風景に重なり合うのを感じる。2年生の子どもたちが描いた線、それは身体いっぱいの表現である。低学年の子どもたちの表現の魅力、可能性を大いに感じた。今後も身体感覚を研ぎ澄ませ、子どもたちが生き生きと活動するような題材を開発していきたい。



「蒲を描く」和歌山市立松江小学校2年生 指導：西井恵美子，2011



蒲のある風景